

# 子ども虐待防止 オレンジリボン運動

## 令和6年度学生によるオレンジリボン運動実施報告書

実施主体 名古屋学芸大学 別科助産学専攻学生 17名（5期生）

実施内容 子育て支援施設を訪問し、作成したリーフレットを配布

### ① 事前に取り組んだ内容

1. 地域母子保健学の講義で児童虐待の実態や支援体制について学んだ。
2. 母子と家族の心理の講義で児童虐待を受けた子どもや家族への影響について学んだ。
3. 乳児用・幼児用リーフレットの作成を行った。

乳児期（1部）と幼児期（1部）の子どもをもつ母親に宛てたリーフレットを5人から6人のグループで作成した。子どもの発達やお母さんの心配事にフォーカスしながら、赤ちゃんの揺さぶりや、お母さんの心と体を気遣いながら不安や悩みを抱えないこと、相談できる施設の紹介などを盛り込んでいる。子育てして良かったと思えること、子育てしていて感じる幸せな気持ちを大切にできることなど、助産学生としてのメッセージが込められている。

### ② 実施期間に取り組んだ具体的内容

12月から1月に各グループの代表者数人が子育て支援施設を訪問し、来所している母親の話を聞きながらリーフレットを配り説明をした。

<子育て支援施設でリーフレットを配布している様子>

\* ところと



\* クレヨンひろば・クレヨンパーク



\*名古屋学芸大学子どもケアセンター



### ③ オレンジリボン運動を終えて（グループ代表 学生の声）

・"夜泣きがひどくて寝かせるのに一苦労だ"、"父親では泣き止まない"などと不満を話す母親も多く、泣きが母親のメンタル面に大きな影響を及ぼしていることがわかった。そのような方に対して、乳児の泣きの特徴を話すと、"あやせない自分が悪い"のではないのだと安心する様子も見られた。育児が思うようにいかず、さらに心身の疲労も伴うと虐待のリスクも高まるため、乳児の泣きについて支援し、母親の育児不安を解消することは児童虐待予防に対して必要な支援であると考えます。

・幼児期の「イヤイヤ期」のパンフレットを作成し、いらっしゃった子どもの母親にお渡ししました。実際に、イヤイヤ期に突入し始めている子やピークの子が多く、それに悩んでいる母親も多かったので、この活動は母親の悩みに寄り添うことができ、児童虐待防止に繋がれると感じました。また、パンフレットを活用することで子どもとの関わり方やサポート資源などを手元で見返すことができるため、1日限りの単発的な支援ではなく日常生活にも活かすことのできる支援であったと考えます。

・児童虐待防止のためには、両親が気分転換を図り育児にかかるストレスを適切に解消することが大切になると考えます。他の子育て世代の親子と関わる場所・機会があることは、児童虐待防止のためにも大切であると実感しました。児童虐待予防や対処のために、自分たちが今できることは何か、これから助産師になる中で行っていけることは何か、考えていくきっかけとなった。そして、子育て世代だけでなく、妊娠期における支援やプレコンセプションケアの中で行なっていけることに目を向けていくことの必要性についても気付くことができた。今後もオレンジリボン運動につながる活動を継続していきたい。

・地域の子育て支援施設が、子ども達は同年代の子どもと関わる機会を増やし、安全な環境の中で遊ぶことができ、母親は安心してその間に母親同士で日頃の育児の息抜きができることで、母子にとっての重要な居場所であることを学びました。少子化が進み地域の子育て世代同士の関係が希薄になりがちな現代において、日常的に母子同士をつなぐ環境があることは結果的に児童虐待を予防することにもつながり、そういった施設があることを母子

に1番近い医療従事者として広めていけると良いと思いました。

・お母さんたちの悩みは主に上の子との関係性や、家事との両立などで悩まれている方が多い印象でした。反対に、上の子の育児で赤ちゃんの特性について理解しているため、乳児の子どもを育てるのにはそれほど苦労しなかったというお母さんもいました。人それぞれ捉え方は異なりますが、どの母親も共通していたのは上の子との関係性であったため、そこに対する支援が必要だと学びました。

・施設を知った経緯では、自分で調べ、隣のママたちの話を聞くなど保護者たちは遊び場を求めていることがわかった。助産師は地域の社会資源を理解している必要があり、母子共にリフレッシュできる施設があることは虐待の予防につながると考える。

～助産を専攻する学生たちは、オレンジリボン運動を通して妊娠期からのプレコンセプションケアの重要性や子育てしている母親やその家族への支援の重要性について学ぶことができました～